

專門部活動報告

「強化部の取り組みについて」

強化部長 梶原 健

【はじめに】

大分県ハンドボール協会創立 50 周年誠にありがとうございます。振り返ってみますと、諸先輩方の意志と伝統を受け継ぎ、現在まで大分県ハンドボール協会は輝かしい実績を残してきました。これもすべて大分県ハンドボール協会に携わっていただいた皆様のおかげであると確信しております。

【強化部の成果】

さて、平成 20 年度におこなわれた第 63 回国民体育大会・チャレンジ大分国体は、大分県関係者をはじめ、多くの県民の方々に支援していただき、支えられた大会でありました。本協会は、大分国体へ向けて、小学校の段階から強化をしてきました。その結果、少年男女で、第 3 位という素晴らしい結果を収めることができました。

これは、小学生から全国大会で活躍し、中学校でも JOC 大分選抜チームとして素晴らしい成績を残すために、ご尽力をいただいた指導者並びに、児童・生徒達のおかげであります。特に、平成 16 年度には、女子選抜チームが JOC 全国大会において優勝、さらに翌年（平成 17 年度）に、女子選抜チームが第 3 位という結果を残しました。

成年男女も、ふるさと大分県のために、実業団で活躍していた選手達が、「ふるさと選手」として地元に戻って活躍してくれました。高校までを大分で過ごした選手達が、大分県チームの一員として、試合に出場してくれる環境も整えることが出来ました。

こうした、ピラミッド型の取り組みができたことは、大分国体のおかげであると考えます。この成果を一時的なもので終わらせることがないように、さらなる強化を目指していかねばなりません。国体世代の子ども達が、大分県に戻ってきて、指導者として活躍できる場を作り上げ、また新たな世代へ引き継いでいくことが必要となります。

強化部として、この 10 年間の大きな成果を下記に記載しておきます。

・平成 16 年度	全国 JOC ジュニアオリンピック (女子)	優勝
・平成 17 年度	全国 JOC ジュニアオリンピック (女子)	第 3 位
・平成 19 年度	ジャパンオープントーナメント (成年女子)	準優勝
・平成 20 年度	第 63 回国民体育大会・大分国体 少年男子	第 3 位
・平成 20 年度	第 63 回国民体育大会・大分国体 少年女子	第 3 位
・平成 22 年度	第 65 回国民体育大会・千葉国体 少年男子	第 5 位
・平成 22 年度	全国 JOC ジュニアオリンピック (女子)	第 3 位
・平成 23 年度	全国 JOC ジュニアオリンピック (女子)	第 3 位
・平成 24 年度	第 67 回国民体育大会・ぎふ国体 少年男子	第 3 位

【これからの展望】

大分国体までに培ってきた強化法を継続させることが大切です。大都会に比べるとハンドボールをおこなっている人数も少ない、この大分県がジュニア層の活躍により、全国で結果を残せていることを続けていかねばなりません。その為に、ジュニア層の普及・育成・強化を成し遂げて、「強い大分県」を継続させていくことに力を注いでいきたいと考えます。

専門部名： 普及部



【40周年から50周年までの10年間の活動状況】

◎小学生に新日鉄体育館での週1回の継続的なハンドボール教室の開催

- 大分市東部地区の中学校での部員数増加
- 特に大東中地区に教室経験者が多くなり、大東中ハンドボール部設立に貢献
- ・年2回～3回のイベント的ハンドボール教室の開催
 - 日本リーグのトップ選手や監督を招聘した教室開催
 - 大分市スポーツフェスタとの共同開催で広報活動も活性化
- ・高等部での試合数増加を目的とした、高校生の県リーグ参加への促進
 - チーム数・公式試合数減少のため、選手活躍の場の提供を推進



【近年の現状・課題】

- ・新規競技者獲得の年2～3回開催の教室が一過性のもので普及効果が小さい
 - 結果的に教室新規参加者が継続的にハンドボールができる環境提供ができていない
- ・小学生のスポーツ少年団での競技人口の減少(新規競技者の減少)
 - 現代の子供のスポーツ離れに逆行できるような普及ができておらず競技者が減少
- ・大分市のみ競技者が集中し大分市以外の競技者がほとんどいない



【50周年から60周年の今後10年間の方針】

◎小学生新規競技者獲得と現スポーツ少年団の継続的活動の支援(大分市西部)

- 年2～3回の教室をスポーツ少年団のある地域付近で開催しきっかけ作りを行う
- ターゲットを絞って日本リーグへの無料招待等を行う(例:ドッジボール経験者など)
- ホームページにスポーツ少年団の活動情報・入団方法等の掲載(広報部との連携)

◎小学生児童数の多い大分市東部地区(大在近隣)のハンドボール新規開拓

- 場所・指導者確保の後、中学校へのアプローチも協会全体の協力体制のもと行う
- ・次世代の指導者育成
- 高等部中心に現役選手から次世代の指導者(教員)になれる人材育成を促進





審判部の現状とこれから



審判部長 宮崎 和彦

登録状況 37人の審判員で、年間300試合以上を吹笛しています。

	小学校関係	中学校関係	高校関係	社会人及び大学生	計
終身	佐藤	長尾	島村		3
A級		亀井 上杉 堀川	上村 松尾 小野 宮崎	吉田	8
B級	古谷			内海	2
C級	河野 後藤 亀岡	瀧元	井上 篠田 梶原 小林 平井	秦 幡東 堀	12
D級	奈良 浜田 芥田	添島 種崎 山口 田中		津田 河野 八坂 徳丸 永井	12
計	8	9	10	10	37

主な取り組み 以下の内容に重点的に取り組んでいます。

審判技術の向上

年3回、審判講習会を実施しています。まず3月に行われる大分県審判伝達講習会で、新年度の変更点や新しい解釈について審判員全員で意識の統一を図ります。続いて新規登録者対象の講習会を小学校の五年生大会で、また大分県リーグの初日にリーグ参加チームの帯同審判員に対して講習会を実施しています。

審判員の新規登録

毎年新規登録者は数名のみという状況が続いています。また登録したものの、ほとんど吹笛せずに、次年度は登録しないような審判員もおり、定着を促す方策があればと考えます。他県では高校生を相当数登録させ、実際に吹笛させているということもあり、見習う必要があります。加えて大分県の女性審判員の登録は一名のみであり、若年層の審判員及び女性の審判員の育成は各チームにおいても是非検討をしていただきたい事項です。

上級審判員の育成

現在、日本リーグ審判員である亀井・堀川の両審判員が活躍していますが、それに続く審判員は出てきておりません。また今後、大分県のA、B級の審判員は、ほぼ毎年一人ずつ定年を迎えていきますので、上級審判員の育成は切実な課題です。上級者の育成を怠ると、毎年、帯同審判員として年間3回派遣していますが(九州ブロック国体、九州中学校体育大会、九州高等学校選抜大会)、この帯同審判制が危うくなります。これらの試合はいずれも全国につながる重要な試合であり、各県のトップの審判員が集まらなければ、大会運営も困難な状況に陥ります。大分県協会の審判員を取り巻く環境は、もう数年経過すると、危機的な状況に陥る可能性があるといえます。

審判員の地位向上・待遇改善

24年度からチーム指導者の報奨制度と同様に、審判員の活性化・底辺拡大・レベルの向上を目的に、審判員の表彰制度を導入しました。審判員の意欲向上につながればと考えています。



これまでとこれからの課題

大分県ハンドボール協会設立から50年間、「各チームの指導者がいなければ、チームが成り立たなかった」という事実に伴い、「審判員がいなければ、いかなる公式試合も成立しなかった」という、やはり紛れもない事実があります。過去行われたすべての公式試合において、審判員の諸先輩方が試合を司る重要な職責を担ってきました。各カテゴリーにおいて、大分県ハンドボール界が全国的に素晴らしい成績を残してきたのは、もちろん各チームの指導者の指導力の賜であります。審判員が各試合を吹笛し、ともすると目の当たらない場所で、その好成績を下支えしてきたことを忘れてはなりません。

以下は IHF が審判員にもとめる資質です。

- ・Leadership … どのようなハンドボールをさせたいか。試合の**指揮者**として。
- ・Honesty … どのような試合展開でも**誠実さ**をもって。
- ・Knowledge of the rule … **ルールの熟知**。その根底に流れるものを知る。
- ・Firmness … いかなる時も信念を持って、**冷静**な判断を。
- ・Good judgement … よく観察、確認、**正しい判断**をして、判定する。予測で吹笛してはならない。
- ・Good fitness … 走れる、**強い身体**で。高速化に対応して。「we must run, too」
- ・Sense of humor … 試合を円滑に進めるために、**ユーモア**が必要な時も…。
- ・Courage … 誰がプレーヤーでも、誰がベンチにいようが、**勇気**をもって。
- ・Cooperation … 選手、ベンチ、マッチバイザー、オフィシャル、モップ係、観客と**協力**して。
- ・Fellowship … 2人の**仲間意識**をもって。



審判員はこの10の項目について、各個人でしっかりと目標を持ち、審判技術の向上に努めています。今後とも各大会において、誠実なレフェリングと品格を持って、フェアプレイの遂行に力を注いでいきます。

しかしながら主な取り組みでも述べているように、審判員の現状は厳しいものがあります。以下が今後の課題となります。

・審判技術の向上。

各審判員が向上心を持ち、審判技術を高めていく必要があります。残念ながら登録審判員の中でもその自覚を持たない人もいます。

・審判員の実働人数を増やす。

特定の審判員に偏ってしまっている吹笛数を均等に。

・上級審判員を増やす。

審判員が上級審判員へチャレンジしやすい環境を整える。(受験料、宿泊費、旅費等)

・新規登録審判員または女性の審判員を増やす。

高校生を含めた各チームの協力が不可欠です。

最後に審判員のみなさんへ

審判員は競技者とともに、ハンドボールというスポーツを作り上げていくための必要不可欠な要素です。審判員もアスリートとして、競技に参加するという意識を持って試合に臨み、競技者とともに試合を楽しむ気持ちを持つことが大切です。「嫌だけどやらされている。」や「しょうがないから。」というスタンス、考え方からの脱却をしなければ、次のステップには進めません。審判員が高い意欲を持って、ノブレスオブリージュ (noblesse oblige) の精神に則り、積極的に審判に取り組むことが、大分県ハンドボール界のさらなる飛躍につながっていくことを確信します。「いい審判がいる県はチームも強い」と言われます。大分県でもその実現に向け、審判団一同、研鑽を積んでいきましょう。



広報部の活動と今後について

広報部 部長 新名憲三

この10年間を振り返って見ると、最大のイベントとして「おおいた国体」が開催された事である。広報部は、この国体開催に向けて「県協会のホームページ」制作に着手した。

しかし、ホームページ制作は出来たが掲載活動が停滞していたために、「おおいた国体」での軌道に乗れず国体内容をインターネット上で紹介する事が出来なかった。試合結果は、国体本部の大会ホームページに頼る形と成ってしまい詳しいゲーム内容などを配信する事が出来なかった。

この事を反省し、3年前にホームページをリニューアルした。この時、ホームページ掲載のシステムを変更し担当者負担の軽減を図った。

この事により、円滑・迅速に掲載出来るように成りアクセス数も順調に伸びた。

取り組んだ内容は、

- ① 担当者が個人家庭のパソコンを使用してインターネットに接続していたが、協会所有のノート型パソコンを購入しUSB通信端末にて接続する様にした。
- ② また、1人しか行えなかった掲載を、現在では2人行える様にした。
- ③ 役員改正に於いて、広報部員を監督・コーチなど兼務している方から広報活動のみ出来る人材へ組織改正した。

この上記3項目を行った事により、個人負担の軽減が図られ役割分担が明確に成った。また、各部門と連携を図りながら掲載内容を次々に多彩にしていった事や、移動式入力端末である事から大会会場でリアルタイムに更新でき迅速な対応が出来る様になった。

これで、目標としたホームページ掲載活動は一定の軌道に乗ったと判断している。

今後の課題は、いかに一般の方々に子供達が頑張っている姿を見て頂けるかである。

アクセス数が多くても、その99%はハンドボール関係者であるためにハンドボールを知らない方やハンドボールを見る機会の無い方々に見て頂くためのコンセプトが必要である。

そこで今後の取り組みとして、下記の項目を掲げ未来へ向かって配信しインターネットを通じてハンドボールの普及に貢献する活動を目標とする。

活動項目

1. 他の機関ホームページと親睦・関係を結びリンクを張る事
2. 協会の発行する紙物にホームページアドレスを掲載する事
3. 普及部の活動を大きく取り上げ、底辺拡大へのアピールの場を設ける事
4. 迅速・詳細で見栄えのするホームページ掲載を行う事

大分県ハンドボール協会 ホームページアドレス

URL : www.oita-handball.org/